

白金葎

平成二十三年六月発行

第四号



白金蔭月例句会案内

七月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第一和室)

兼題: 昼寝、松葉牡丹

八月十五日(月) 9:30 ~ 11:00 小池ボート乗場より蓮見舟吟行。乗船料千円。

12:00 ~ 15:00 (アビスタ第五学習室)

九月十六日(金) 12:00 ~ 15:00

(アビスタ第四学習室)

兼題参考句 (7月15日分)

昼寝

我生の今日の昼寝も一大事

山に金太郎野に金次郎予は昼寝

東北は上下に長し寝冷腹

野に蜜のあふれて村のひるねどき

松葉牡丹

目の前の此事こそ大事日照草

松葉牡丹ぞくぞく咲けばよきこと

松葉牡丹子の知恵育つ眠る間も

松葉牡丹咲かせて夫婦少し老ゆ

高浜虚字

三橋敏雄

松本勇二

桂信子

岡本眸

山崎ひさを

古賀まり子

満田玲子

月例句会報(11/6/17 薫風、紫蘇 投句 14名)

窪田空華

小山陽也

伊藤一艸人

荒梅雨や義理欠くことの多くなり
恋といふ妖しきものよ蛭狩
ペダル漕ぐ少女の髪に風薫る
紫蘇の葉の赤きになぜか母懐ふ
多摩川の闇しんしんと桜桃忌
我が庭の紫蘇古ければ少し香
泰山木一輪だけの花咲けり
青竹を編みて井戸蓋風薫る
雨上るザクロ小さき実をつけり
バラ園はその人偲ぶ名札つけ
薫風やスカイツリーの柳腰
紫蘇積んで子連れ自転車過ぎゆけり
伽羅聞くや梅雨の芸大美術館
紙コップで飲む地ビールや青嵐

潮上る紫陽花開く浜離宮

吉羽多美子

青紫蘇の太巻きつまみ元力士
縄文の土偶のおっぱい風薫る

増田陽一

紫蘇の香の手にて受けとる赤児かな
仲見世をよけて裏道心太
薫風や足になじみしスニーカー
緑陰にくるとむけるゆで卵
緑さす四十九日の墓の前

青木啓泰

梅雨茸もわが日もめるとどうんかな
蜻蛉が目玉を搔けり空深し
唇形科と覚えし紫蘇や蔵の暗くら
腕時計の蓋の曇りや浅蜷めし
住み分けて人と鴉や風薫る

増田悦子

紫蘇の実をかけて座敷の昼御飯
紫蘇の実を抜けば目の合う墓がいる
麦刈りにさそりのようなコンバイン
麦秋が仮眠している晴れ間かな
薫風やまるまる目玉の人が来る
薫風や犬の方が好きと漱石が
厨の声に宿六青紫蘇つむ
ゆさゆさと漢あぢさゐ抱き来る

飯田孝三

紫蘇摘みて戦後小学五年なり
少年に鉛筆の香や夏近し
金亀子覗く網戸に風通る
梅雨ながし渋谷に黝きモヤイ像
風薫る白き帆走り手賀の湖
短夜やてにおはののをやに替へて
有り体に言へば相棒きうりもみ

しろみそら

父母に素足をみせる三姉妹
紫蘇の香や日暮れて空の低くなる
薫風やペアチケット予約して

光成高志

紫蘇叢に頭突込み間引きけり
セロファンに青紫蘇重ね十二枚
この路地の先に里山風薫る
御師らつきょうの宿裏通りまで風薫る
辣蕪らつきょう剥き筈に乾かすその白さ

倉田紀子

ベランダに二人暮らしの粽解く
風薫る寝釈迦に広き蹠かな
出勤の朝の眉ひく柿若葉
茅の輪結ふ袴に風の高麗郡
麦秋や高麗にあまたの馬の墓

光みち(光成敏子改め)

六月や岡本太郎のしゃくり顔

紫蘇卷の豚肉豆腐香味焼
目に見えぬ放射線量紫蘇畑
梅檀の花送迎のバス来る
薫風やギター鳴り出す男子寮

黒田彰一

梅雨の蝶小さく白く吹かれ来る
顔伏せて蚩袋の待ち伏せる
節電や逆さに回る扇風機
閨門を開けて薫風通しけり
紫蘇包む竹皮の隅啜りをり

嘉悦羊三

民宿の紫蘇の香零る厨口
フルーツの銀の吹鳴風薫る
まほらなる日は車田の田植唄
若鮎の追ひさで漁の淡海かな
峡や瀬のはんぎき石の顔したる

選句結果(数字は入選数)

- | | | | | | |
|---|------------------|-----|---|------------------|-----|
| 4 | 風薫る寝釈迦に広き眺かな | 紀子 | 1 | 泰山木一輪だけの花咲けり | 陽也 |
| 3 | 蜻蛉が目玉を搔けり空深し | 陽一 | 1 | 紫蘇の香の手にて受けとる赤兒かな | 多美子 |
| 3 | 緑陰にくるりとむけるゆで卵 | 多美子 | 1 | 閨門を開けて薫風通しけり | 彰一 |
| 3 | 父母に素足をみせる三姉妹 | そら | 1 | 六月や岡本太郎のしゃくり顔 | みち |
| 3 | 峡や瀬のはんざき石の顔したる | 羊三 | 1 | 多摩川の闇しんと桜桃忌 | 空華 |
| 3 | ゆさゆさと漢あぢさる抱き来る | 孝三 | 1 | 民宿の紫蘇の香零る厨口 | 羊三 |
| 2 | 梅雨の蝶小さく白く吹かれ来る | 彰一 | 1 | 若鮎の追ひさで漁の淡海かな | 〃 |
| 2 | 梅雨茸もわが日もめるとだうんかな | 陽一 | 1 | 節電や逆さに回る扇風機 | 彰一 |
| 2 | ベランダに二人暮らしの粽解く | 紀子 | 1 | 梅檀の花送迎のバス来る | みち |
| 2 | 辣蕪剥き箆に乾かすその白さ | 高志 | 1 | 顔伏せて蛍袋の待ち伏せる | 彰一 |
| 2 | 短夜やてにおはののをやに替へて | そら | 1 | 目に見えぬ放射線量紫蘇畑 | みち |
| 2 | 薫風や犬の方が好きと漱石が | 孝三 | 1 | フルートの銀の吹鳴風薫る | 羊三 |
| 2 | 出勤の朝の眉ひく柿若葉 | 紀子 | 1 | 麦秋が仮眠している晴れ間かな | 啓泰 |
| 2 | 仲見世をよけて裏道心太 | 多美子 | 1 | 紙コップで飲む地ビールや靑嵐 | 一艸人 |
| 2 | 腕時計の蓋の曇りや浅蜷めし | 陽一 | 1 | 有り体に言へば相棒きつりもみ | そら |
| 2 | 伽羅聞くや梅雨の芸大美術館 | 一艸人 | 1 | 少年に鉛筆の香や夏近し | 悦子 |
| 2 | 麦秋や高麗にあまたの馬の墓 | 紀子 | 1 | 唇形科と覚えし紫蘇や蔵の暗 | 陽一 |
| 2 | 住み分けて人と鴉や風薫る | 陽一 | 1 | 緑さす四十九日の墓の前 | 多美子 |
| 2 | 麦刈りにさそりのようなコンバイン | 啓泰 | 1 | 薫風やスカイツリーの柳腰 | 一艸人 |
| 2 | 紫蘇巻の豚肉豆腐香味焼 | みち | 1 | 縄文の土偶のおっぱい風薫る | 孝三 |
| 1 | 薫風やギター鳴り出す男子寮 | 〃 | 1 | まほらなる日は車田の田植唄 | 羊三 |

1 薫風や足になじみしスニーカー

我が庭の紫蘇古ければ少し香

紫蘇の実をかけて座敷の昼御飯

雨上るザクロ小さき実をつけり

紫蘇摘みて戦後小学五年なり

紫蘇叢に頭を入れ間引く匂ふ哉

ペダル漕ぐ少女の髪に風薫る

紫蘇積んで子連れ自転車過ぎゆけり

厨の声に宿六青紫蘇つむ

茅の輪結ふ袴に風の高麗郡

御師の宿裏通りまで風薫る

荒梅雨や義理欠くことの多くなり

バラ園はその人偲ぶ名札つけ

荒梅雨や義理欠くことの多くなり

恋といふ妖しきものよ虫狩

金龜子覗く網戸に風通る

青紫蘇の細巻きつまみ元力士

梅雨ながし渋谷に動きモヤイ像

紫蘇の香や日暮れて空の低くなる

紫蘇の実を抜けば目の合う暮がいる

この路地の先に里山風薫る

薫風やまるまる目玉の人が来る

多美子

陽也

啓泰

陽也

悦子

高志

空華

一岬人

孝二

紀子

高志

空華

陽也

空華

悦子

悦子

孝三

悦子

悦子

啓泰

高志

啓泰

青竹を編みて井戸蓋風薫る

潮上る紫陽花開く浜離宮

青紫蘇を一枚一枚重ねたり

風薫る白き帆走り手賀の湖

薫風やペアのチケット予約して

紫蘇の葉の赤きになぜか母懐ふ

紫蘇包む竹皮の隅噉りをり

一句鑑賞

一句鑑賞

節電や逆さに回る扇風機

扇風機を止めると余力で回りつづけ、止まった途端つと

後戻り。その瞬間を捉える。節電では、戦中戦後の窮乏時

代を思い出す。「節電」を忘れるにつれ、節約、節度、節

操・・・およそ節の字は置き去り。身辺物づくめ便利尽し。

そんな、文明社会に閉口、自然を肌身にし、心通い合う。

昔の生活を懐かしみ、行う人が増えている。今次多重災害

は、その動きを勢いつけるだろう。「節電」、「逆さに回る」の

意味合いは深く、象徴的だ。平明、ほのかな諧謔と思想性

(イデオロギーではない)が籠り、く「や」が無量の感慨を伝

える。

陽也

一岬人

高志

悦子

そら

空華

彰一

彰一

飯田孝三

彰一

光成高志

梅雨茸もわが日もめるとどうんかな

陽一

この鬱陶しい梅雨に生える茸も、わが日も、めるとどうんかなと切字に余情を任せた句。メルトダウンとは？先の孝二さんのメルトダウンの句も選して、その説明を省略した。私は理系出であるから、ここで説明する義務感に責められる。茸 卷末に説明したので、気になる方はそこをお読み願いたい。原発をお釈迦にする現象になぞらえて、一日も、いや来し方も、ひよつとしたら行く末も同じだよと、そう、句会の時に言葉が出なかった、わが人生をリセツトして、御破算にして、という気持ちではないでしょうか。かながきの諧謔性は、新たな歩みをとの決意を伝えていると思います。

黒田彰一

麦秋が仮眠している晴れ間かな

哲泰

麦秋とは麦が熟する初夏のころ。好天気なら転た寝が気持ちよい。仮眠である。でも、梅雨の時期でもあり、麦は早く刈つてほしいと云っているし、農家は気がでない。今の世の中、晴れ間も少ないし、物騒で仮眠もままならぬ。いわんや熟睡などとてもとても。

光 みち

風薫る寝釈迦に広き蹠かな

紀子

高野山金剛峰寺蔵本を見ることがあります。対面して、お頭を左側に広き胸を開いて横たわるお姿。蹠のことです。靴のサイズは長径をいい、短径は足幅のことです。扁平足の人は幅広である。釈尊は扁平足であられたのか？冗談は扱置き、広き蹠がポイント。広き胸元では常套ですね。広きという言葉には釈尊の全体像、お心まで含まれていて、読者を清々しくさせる句です。

倉田紀子

父母に素足をみせる二姉妹

そら

この度は、白金葎句会に参加させていただき有り難うございました。又この様な機会を下さり恐縮です。各々の家庭に集い両親を中心に近況報告。季語の素足が効果的で動くことがありません。「素足をみせる」の中七は、心もゆるすことであり、羅の暖簾の奥からざわめきと風も感じます。若々しいお句と思いました。

青木啓泰

麦秋を鏡に映し理髪店

多美子（白金葎二号）

床屋の鏡に映った黄金の麦秋を見ていられるということ
は、大いなる幸せである。心情的にも大変精神状態の良
ことを示している。左右逆に映る理髪店の鏡に映る時計が
正常なる時計であれば、鏡の外の時計は逆文字の逆進行を
示している。麦秋を静かに出て行く人もいる。ひっそりと逝
つた人もいる。しかし作者の目には黄金の麦秋が鏡の中にあ
る。この広い麦秋に左右の逆はない幸せが潜んでいる。

飯田孝三

麦秋や「利根川図志」は蔵の中 敏子（白金葎三号）

『利根川図志』は、江戸末期の利根川中・下流沿岸の地誌
（赤松宗旦著）。社寺、名所旧跡、物産習俗等を挿絵入り
（北斎筆）で詳述。新緑の屋敷森に囲まれた、恐らくは土蔵
に仕舞われていた『図志』に見えたのである。緑の植田を交
え、流域に広がる麦秋の金の輝きに思いを馳せ、今更に、
眼前、今昔の観に驚く。薄暗い蔵内と明るい黄麦の野面の
対称が際やか。懐かしい麦秋の光景が甦る。Gone are the
days when ripe wheat brighted, gone from the earth
down into an old dimm celler away. (註、註、名曲の歌謡
を汚してしまつた。斜字は全く当はずいぼつ。)

自句反芻

飯田孝三

麦秋の兵の髭面馬の鼻

髭は初句、髭だった。俳句仲間のFさんから、髭ではと

物言い。実は、髭、髯、鬚を並べて見、髭では、わが世代、つ
いカイゼル髭、ヒトラーのちよび髭が目につく。顔中ひげだ
らけは鬚か、とてそうしたが、なるほど、髭がいい。髭は2
0代、30代。髯は中年以降の風。馬が落ちこむ髭は、字面
も麦禾の硬質感に通い、麦秋の氣息がより身近だ。思い込
みは句を痩せさせる。俳諧は、俳句の今も座の文芸。仲間
はありがたい。

ハガキ句管見（第四報）

飯田孝三

客人に日の匂ひあり風炉手前

敏子

眩い緑を来た茶の湯の客に、ふつと、日の匂いを感じた
という。茶の湯も、俳句も日本固有の文化、文芸である。こ
の句を前にし、きめ細かく、豊かさに満ちたこの風土に生
を享けた喜びを、改めて、しみじみと思つた。

ハガキ句第四報 (05・6・1)

細竹の細く巻きたる瓜のつる

百合子

放哉忌明くる虚子の忌春の山

孝三

自由の女神も倣ひ花まつり

妙子

みどり児の頬に接吻風薫る

春美

白梅の光に雨の細さかな

敏子

老姉妹たわわに紅き柿をもぐ

高志

客人に日の匂ひあり風炉手前

高志

草笛の使い古しは野に捨てり

高志

夏の河淵を磨いて曲りゆく

高志

突然に土曜の昼の牛蛙

高志

茶の湯に疎いが、五月、茶室の炉を塞ぎ、鉄製か、土製の持ち運びの丸い炉を畳の上に置くという。初風炉は旧暦四月一日とか。それを境に、茶室は、全て、たたずまいを一新、清々しく、明るい。日頃、身近な些細に、無量を感じ、おどろく。不易流行とはこれだ。即ち、俳句のころだが、茶の湯のころにも通うだろう。「〜に日の匂ひ」と、巧まなく、銜わず決めて、見事。又、「〜あり」の切れがけれども、味なく、快い。季の機微を衝き響き合う。手許の、幾つかの歳

時記を繰ってみたが、古句を含め、例句は少なく、どれも感心しない。せいぜい、「定年の人を主客に風炉手前」(富田青近)「新編俳句歳時記(夏)『講談社』ぐらいだが、「うん、分かります」の限り。

突然に土曜の昼の牛蛙

高志

週休二日が定着したこの頃では、土曜は、すなわち昼である。「突然」は、「牛蛙」にかかる文理だが、同時に「土曜の昼」にも通う氣息があり、そのあたりの、阿吽の機微が面白い。農村で育つたぼくには、昔、思いがけず、不意に、「わくわく」とやられた記憶が、今でも、生々しい。頭上に、夏の太陽が輝いていた。「土曜の昼」が利いている。とくに「昼」が臍だろう。平成、それも十年代、日本の牛蛙である。肩の力が抜けた、手練の諧謔を味わうべし。

細竹の細く巻きたる瓜のつる

百合子

「細竹」の「〜で成功」「細〜の細く〜」と重ね、一句仕立てに言い下し、知らん顔。とぼけぶりがいい。リズムも細竹の蔓の風情に適い、好感。「〜つる」の平仮名止めも、心得たものだ。竹と瓜の、この日常の、当たり前に、はたと、よどみない涼気を肌にする。

夏の河淵を磨いて曲りゆく

高志

風景はよく見えるのだが、今一つ、抜け切れない憾みがある。「磨いて」の擬人法はどうだろう。

草笛の使い古しは野に捨てり

敏子

草笛に、使い「古し」はどうか。又、「くは」は、断り過ぎではないだろうか。その決然たる思いが何かは、この句の限りでは分らない。

お便り広場（到着順、敬称略）

『白金霞』が好評のようで喜んでいきます。小生がお役にたつことがありましたらお知らせ下さい。お気遣い無用、きままにやりますから。草々（H.23.6.3 飯田孝二）

前略、平素は吟行等で大変お世話になり有難うござい
ます。此度は『白金霞』第三号をお送り下さいましてあり
難く拝受いたしました。号を追うことに内容充実して、今
号も興味深く拝読いたしました。それにしても現在は貴兄
がご自分でPCのワードを打つての編集印刷かと推察いたし
ますが、大変ご苦勞のことと思われます。早く会費制にし
て印刷は業者さんにおまかせして、貴兄はもつと別の面に
時間を割かれた方が、より有意義ではないかと勝手に考え
ております。ご依頼のありました小生の^註旧吟同封いたし
ました。丁度、今日が^註天安門事件の日に当り、私は翌年
三月に北京と河北へ出掛けた時、詠んだ句で、まだ毛思想
の残影の残る中国だったので、そんな中国の片影でも感じ
とつていただきたいと思いますので、掲載等は考えておりませ

ので、お読み捨て下さい。また、近く吟行でお目にかかる
存じますが、とり急ぎ三号拝受の御礼を申し上げます。

（H.23.6.4 伊藤一州人）

^註 黄砂の春と題した二五句。左に六句抽出。

天安門の夢幻興亡の国かすむ

流血の広場を風が見下ろせる

青麦や石獣人にやさしかり

耕して地平天帝これを見る

春雷や回春丸をまとめ買ひ

黄砂ふる北京や犬に遇はざりき

^註

一九八九年六月四日に、同年四月の胡耀邦の死をきっかけとし

て、中国北京市にある天安門広場に民主化を求めて集結して

いた学生を中心とした一般市民のデモ隊に対し、中国人民解

放軍が武力弾圧（市民に向けての無差別発砲や装甲車で轢き

殺したとの報告がある）し、多数の死傷者を出した事件であ

る。日付を冠して、六四天安門事件と云う。



同封切手（19）

第3号拝受感謝します。にぎやかな俳誌です。貴兄の努

力に花を咲かせることも遠くないです。がんばって下さい。

(H. 23. 5. 3 鬼澤貞治)

白金殿第三号ありがたく頂きました。我孫子日記、編集後記、かるみ以後16頁の写真等まことに見事です。少しは俳句をと思ひ立ち、書庫を捜したところ、山口誓子「鑑賞の書」がありました。お持ちですか？今ニューヨークを使うCGS単位、ばかなことをしましたね。長尚さんだけは大反対、あとはお上のことでそのまま採用になりました。戦後の「新かな」と同じで新聞も学界もだらしなく、使用するようになりました。建築でも「梁」は使えず、「はり・柱」となりました。「柱はり」にすると「柱はり」と読まれるからです。ある先生だけは梁を使用していました。益々の活躍を祈ります。

(H. 23. 6. 12 小山陽也)

こんにちは！お元気ですか。敦子さんから“白金殿”を受け取りました。ありがとうございます。ゆっくり見ます。句集(？)を作る程すごく勉強してたんですねー。

弥栄子 裏面第十五窟西壁小龕

(H. 23. 6. 13 杉浦弥栄子)

いつもお手数をお掛け申します。よろしく万々。加藤木紫蘂氏は苗字が、加藤木(かとうぎ)で名が蘂月(しげつ)です。元水戸藩の木村奉行です。元気ですよ。名実口吻共

に水戸藩二十五万石の古老武士。

(H. 23. 6. 17 青木啓泰)

花火終(花火師囀の中帰る)

紫蘂

畑が縁で5月入会。そして6月、お名前と顔が一致した。二次会に参加。空華さんが「しかし日本語がオカシイよね」と。「情緒がないですよね」と私。詩心に進んだ。空華さんのお顔は若返っていた。彰一さんは扇風機の自句自解を照れながら先に話してから選をした孝三さんに訊ねた。「扇風機が逆さに回る」は、過去から今に還ってきている。物質文明に対する思いの深い句です」というようなことをやわらかく伝えた。高志さんは原発について一言有。四氏の頭脳は優秀である。百も承知だが、「さん付けで良い」が好い。私は頓珍漢であるが時々は勘でもって会話が成立したと思いたい。二次会参加すべし！

(そら H. 23. 6. 17)

受贈誌(六月号)

豆の花あやとりの子の祈りの手 (草の花218号) しろみそら
揺れて三月さくらの色のチューリップ (野火) 小澤房子

剥き出しの五月となりぬ地震の海 (〃) 〃

自転車に傘の干されて春隣 (〃) 本田久江

校門の前に来てゐる雉の声 (〃) 黒川良子

飛花落花余震九百越えんとす (彩99号) 平野ひろし

・山蛭の刻印歴と十日なほ (〃) 〃

田水張る水口に石一つ置き (〃) 〃

苗箱の矩形そのまま余り苗 (〃) 〃

山若葉峡の老婆の葎薩顔 (〃) 〃

春光や白金葎の枯高穂 (〃ひろし選) 光成高志

入学式君が代歌ふ中にある (〃) 〃

「萱」吟行句会 (6 / 10 新宿歴史博物館)

麻服の紳士足早四谷駅 こい乃

時の日や浪曲かかる博物館 敏子

夏草や江戸石垣の見附跡 一艸人

梅雨晴間学習塾に老集ふ 英子

店蔵や灰しろじろと夏火鉢 良子

六月の展示ケースに燐寸箱 トシ子

石樋残る前にびつしり苔の花 高志

原稿募集

・句会報の中から一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。鑑賞文は二百五十字(五行)を目途にお書きください。・俳句特別作品は十句、評論、エッセイなどは1ページ(千字)以内、連載できます。挿絵・写真も

お寄せ下さい。

我孫子日記

5 / 30 日比谷ギャラリー 6 / 1 S.O.A. 6 / 8 S.O.A. 6 /

10 萱吟行句会 6 / 15 S.O.A. 6 / 16 久寺家中。6 / 17 例

会。6 / 21 利根親水公園 6 / 22 S.O.A. 6 / 28 井上家屋

敷畑 6 / 29 S.O.A. 合間は水泳、菜園事。

*会釈して梅雨の銀座に一壺天

高志

編集後記

今月の例会には、紀子さん、静世さんが参加され、又空華さんは、タイトな日程を調整して参加され、十人の選者を得、十四人分七十句の選を行った。三時間の予約部屋にて実質二時間の選と選評である。瞬発力が必要。見落として見直しは、二次会で行い、作者の了解を得て、誌上句としている。選句結果の項には原句を載せている。これからは、その様にしたいと思っております。もし、推敲後、変更がある場合は、第四週までにお知らせ下さい。

また、福島原発は終息の気配が見えませんが、ハガキ句を再開しようと思っております。ハガキ句は本誌の母体となっていましたので、五年間分の掲載を御了承下さい。ハガキ句は、季感交換を全国版で行う手段であります。お気づきの時、当季雑詠句をお寄せくだされば、ハガキ句として返信

いたします。

芭蕉のかるみ以後(二)

光成高志

6 藪越やぶこしはなすあきのさびしき

野波(秋)

「ささやかな藪を隔てて、両側に住む者同士が、夜空の雲行きを気づかないながら、秋の心細さを語り合つてゐる」

○

1 御頭おかしらへ菊もらはるゝめいわくさ

野波(秋)

「折角丹精込めて作った菊を、上役から無造作にねだられるのは迷惑千万だ、といふやうな話を藪越に語り合つてゐる」

2 娘を堅う人にあはせぬ

芭蕉(雑)

「小身ながらも、菊作りの趣味一筋に生きて、上役にへつらほうともせぬ硬骨の老人である。秘蔵娘を堅く守つて、めつたに若い者に会はせもしない」

3 奈良がよひおなじつらなる細基手ほそもとて

野波(雑)

「奈良に商売に通ふ二人の商人がある。同じ程度の小商人あきんどだが、その一方の老人は、しがない身分ながら、連れの男の

せがれなど隣近所の若い者を秘蔵娘に近寄せぬやう、厳重に監視の目を光らしてゐる」

4 ことしは雨のふらぬ六月

芭蕉(夏)

「今年の六月は雨が降らぬから、一人暑さが厳しく、奈良通ひも楽ではないが、商売にはもつて来いだ、など語りながら、小商人たちが相携へてせつせと道中してゐる」

5 預けたるみそとりむかうがしにやる向河岸

野波(雑)

「百家製の大切な、味噌を、洪水の難から守るため、向河岸の安全な家に預けておいたが、もはや今年の夏は豪雨が降らぬ見極めがついたので、取戻しに使ひの者をやる」

6 ひとといひ出すお袋の事

芭蕉(雑)

「大勢の客を饗応する必要を生じたので、預けた味噌をとり人にやる。それにつけても、味噌作りの上手だった亡き母親の事を家人はふと思ひ出して、互ひに思ひ出を語り合ふ」

7 終宵尼よもすがらの持病を押へける

野波(雑)

「同じ宿に泊り合はせた老尼が、突然持病の癩を起した。これも何かの縁と、若い巡礼の女などが一晩中介抱しながら、わが亡き母親にも同じ持病があつたことなどを語つて聞かせる」

8 こんにやくばかりのこゝろ名月 芭蕉(秋)

「尼寺で檀家の人々が月見の宴を開いたが、突然あるじの尼が癪を起したので、皆病室に集まり、介抱においまくられる。人氣のない座敷に取り残された膳の上のこんにやくを、月が人待顔に照らすばかりである」

9 はつ雁に乗懸^{のりかけしたじ}下地敷^{したじ}て見る 野波(秋)

「送別の宴もたけなはを過ぎて、膳にはいづれもこんにやくを余すだけとなった。やうやく明けしらむ月下を初雁の鳴いて過ぎる時、いよいよあるじは別れを告げ、馬に乗懸下地を敷いて、乗り心地を試して見る」

10 露を相手に居合ひとぬき 芭蕉(秋)

「いよいよ出発となつて、当の若侍は勇み立ち、あたりの草木の露を相手に、居合抜きを一番試みる」

11 町衆^{ちやうしゆう}のつらりと酔^よて花の陰^{かげ} 野波(春)

「町の御歴々が、ずらりと顔を並べて、花見酒に好い御機嫌である。さうかと思へば、僅かなかねを目当てに居合を抜いて、ひとを集める大道芸人もある」

12 門で押さるゝ壬生の念仏 芭蕉(春)

「賑やかな壬生念仏の日、境内の花の陰では、京の旦那衆が酒盛りに打興じ、門のところでは、大勢の参詣客がひしめい

てゐる」

初裏八句目は、前句の「終宵^{よしまがら}」の語から、「名月」を連想した。月見の宴もあるじの尼さんが癪を起したので、月見どころではなくなり、病室に皆集まつている。取り残された座敷は、杯盤狼籍、蒟蒻ばかりが食へ残されている。蒟蒻は尼さんにふさわしい食べ物であると共に、そのさしみは作者芭蕉の最も好んだ食物であった。幸田露伴は「蘇東坡赤壁賦の最後のくだり、肴核既に尽て杯盤狼籍たり。相共に舟中に枕藉して、東方の既に白むを知らず、を俳諧にして、蒟蒻ばかり残るとしたる、軽妙人の頤を解くべし」と言っておられるが、こういう瀟洒とした「おかしみ」は芭蕉独特のもので、全く他の追従模倣を許さぬかるみの至芸と云うべきである。

赤壁賦の全体を読んでみれば、益々、そのおかしみが湧く。舟を浮かべて客と大真面目に詩をうたい、飲酒し、笛を吹き、是に和す。その声鳴鳴然として、怨むが如く慕うが如く、泣くが如く、訴うるが如し、とか、自然の悠久を詠う漢詩の莊重さを茶化す如く換骨奪胎して、膳に残る蒟蒻で言い表した、これがかかるみの芸である。単に、軽く流すのとは訳が違うのである。

深い教養から「ものあはれ」を知つて、己がものにした、

こなれた言葉で氷山の一角を表現する甚とも云うか。

註¹ メルトダウンとは？ メルトは解ける、ダウンは落ちること。原子力発電所の原子炉中の核燃料体が過熱し、多くの燃料棒が、融解すること。鋼鉄製の炉の方に核燃料体が置かれているので、解ければ下に落下せざるを得ない。だから、メルトダウンと英語で云う。日本語では炉心溶融という。核分裂反応を水中で行わせ、水分子で減速させた中性子をウラン²³⁵という原子にぶつけて核分裂を起させ、この時出る熱を使ってお湯を沸かし、その蒸気で発電する。厄介なのは核分裂と同時に百種類もの放射性物質が飛び出ることだ。核分裂が止つても、燃料体は放射線を出し続け崩壊し続け、熱を出し続ける。これが怖いのだ。ヨウ素¹³¹、セシウム¹³⁷などは人体に入りやすく量が多い。メルトダウンは、原発をお釈迦にしてしまう人間には怖い現象だ。使用済みの燃料も崩壊熱を出し続けているが、この処理の方法も確立していない。なんとかなると、未来世代に託しているだけだ。

白金霞 第4号 平成二十三年六月発行

編集・発行人 光成高志(FAX 〇四七-一八七-一〇六八)
発行所 T-270-111 我孫子市南新木二十四十七

